【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	熊本県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	熊本県菊池郡西合志町立西合志中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	０	９	２２
生徒数	８３	８７	９７	０	２６７	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

個を生かす確かな学力の育成を目指して
～仲間と共に高め合う学習集団作りと個に応じた指導・支援の工夫～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

全学年・全教科

最終的に生きる力を育てるためには、教育活動すべてを通して行うべきであると考え、全学年、全教科で実施することにした。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○　テーマ 確かな学力の育成をめざして ～仲間と共に高め合う学習集団作りと個に応じた指導・支援の工夫～ ○　研究の見通し（仮説） ①学習活動の展開、形態、教材及び評価の在り方の工夫により基礎・基本の徹底を図りながら、学び方を身につけさせ、対話・承認・交流を大切にする学習集団をつくれば、一人一人の生徒の学習意欲と実践力が高まり、学力が向上するであろう。 ②学力と学び方について個々の生徒のつまづきや課題・目標意識に応じた指導・支援の在り方を工夫すれば学習意欲と実践力が改善され、学力が向上するであろう。 ○　研究内容・方法 （１）授業形態の工夫 ・習熟度別少人数授業の実施（３年数学） ・複数教師による授業形態の提案授業 （２）選択教科の運営の工夫 ・２５分単位時間の実施 ・習熟度別コース分けと確認テストの実施 （３）評価を生かした指導の改善と工夫 ・ＳＥＴ（自己教育力テスト）結果を基盤にした個人カルテの作成と活用 ・授業における自己評価・相互評価カードの活用 ・授業評価の実施

	（４）日常における学習内容の振り返りの場面設定と学習環境整備 ・振り返りタイムにおける授業や家庭学習の見直し ・学習情報コーナーの学級設置

平成15年度	○　テーマ 個を生かす確かな学力の育成を目指して ～仲間と共に高め合う学習集団作りと個に応じた指導・支援の工夫～ 一人ひとりの生徒にもっと目を向けたいと考え「個を生かす」を入れた。 ○　研究の見通し（仮説） ①　個に応じた指導のための教材を開発し、習熟度別学習など指導方法の工夫・改善をすれば、基礎・基本の確実な定着が図られ、学力が向上するであろう。 ②　学び方を身につけさせ、対話・承認・交流を大切にする学習集団を作れば、一人ひとりの生徒の学習意欲と実践力が高まり、学力が向上するであろう。 ③　指導と評価が一体化した授業を展開し、生徒一人ひとりの良さや課題を的確に評価することにより、学習意欲が増し、学力が向上するであろう。 昨年度の仮説を　①教材　②仲間　③評価　の視点で再構成した。 ○　研究の内容・方法 （１）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫 ・習熟度別少人数授業の実施（３年数学、２年英語） ・少人数授業の実施（１年国語） ・選択授業の選択コースの拡大と充実（教科の細分化） ・補充的選択授業の実施 ・異教科間のＴＴの実施 ・「あいあい学習」（能動型の学習）と「ないない学習」（徹底指導）のメリハリのある授業計画の作成と実施 （２）対話・承認・交流を大切にする学習集団づくりの研究 ・学習形態の研究（一斉学習、グループ学習） ・学習態度の構築（話す態度、聞く態度等） （３）評価を生かした指導法の研究 ・絶対評価に対応した日々の評価法の研究（補助簿の作成等） ・標準学力テストや定期テスト等の分析・検討を行い、授業への反映 ・帰りの会における振り返りファイルの効果的活用 ・ＳＥＴ（自己教育力テスト）の結果の効果的活用 （４）教育環境の整備 ・教室掲示の共通化 ・校内掲示の工夫 ・教師の指導１０項目の制定 仮説ごとに再編し、より効果が上がるように取り組む項目を増やした。

平成16年度	○　テーマ 個を生かす確かな学力の育成を目指して ～仲間と共に高め合う学習集団作りと個に応じた指導・支援の工夫～ ○　研究の見通し（仮説） ①　個に応じた指導のための教材を開発し、習熟度別学習など指導方法の工夫・改善をすれば、基礎・基本の確実な定着が図られ、学力が向上

するであろう。

② 学び方を身につけさせ、対話・承認・交流を大切にする学習集団を作れば、一人ひとりの生徒の学習意欲と実践力が高まり、学力が向上するであろう。

③ 指導と評価が一体化した授業を展開し、生徒一人ひとりの良さや課題を的確に評価することにより、学習意欲が増し、学力が向上するであろう。

※ テーマ・仮説は、平成１５年度の研究の方向でより一層の充実を図る。

○ 研究の内容・方法

（１）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫

・習熟度別少人数授業の実施（数学、英語）
　全学年習熟度別の少人数授業として実施する。

・少人数授業の実施（国語）
　全学年少人数授業として実施する。

・選択授業の選択コースの拡大と充実
　補充学習　時間割の弾力的運用により２５分間の選択授業を実施し、基礎・基本の確実な定着を図る。
　実施教科は、国語、数学、英語の習熟度別のコース選択とし、発展的な学習を行うことができる。
　課題学習　国語、社会、数学、理科、英語で実施する。
　発展学習　音楽、美術、体育、技術、家庭で実施する。

・異教科間のＴＴの実施

・「あいあい学習」（能動型の学習）と「ないない学習」（徹底指導）のメリハリのある授業計画の作成と実施

（２）対話・承認・交流を大切にする学習集団づくりの研究

・学習形態の研究（一斉学習、グループ学習）

・学習態度の構築（話す態度、聞く態度等）

（３）評価を生かした指導法の研究

・絶対評価に対応した日々の評価法の研究（補助簿の作成等）

・標準学力テストや定期テスト等の分析・検討を行い、授業への反映

・知能検査を実施し、学力成就値との関係における効果的活用

・帰りの会における振り返りファイルの効果的活用

・ＳＥＴ（自己教育力テスト）の結果の効果的活用

（４）教育環境の整備

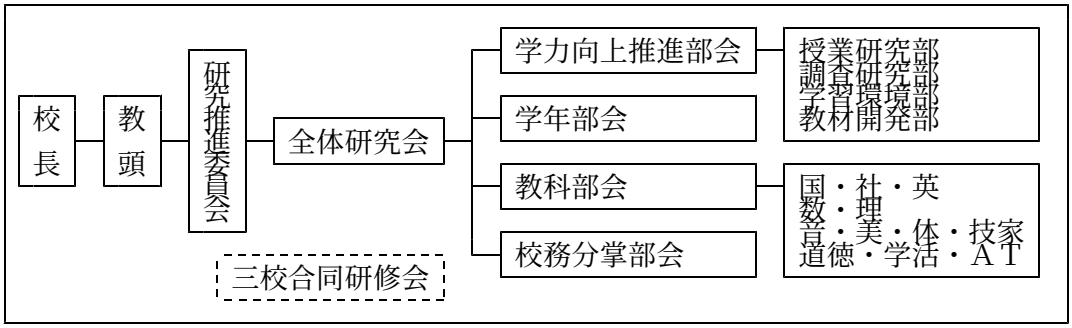
・教室掲示の共通化

・校内掲示の工夫

・教師の指導１０項目の徹底

・中学校校区内の小中連携を図る。
　共通実践事項を決定し、実践を行う。

(3) 研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（１）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫

少人数学習の教科を昨年度の３年数学（習熟度別３コース編成）から、２年英語（習熟度別３コース編成）、１年国語（少人数２コース編成）にも拡大を図ったり、朝の選択授業や学力タイムを実施したりすることにより、一人ひとりに合った指導を行うことができた。全職員で生徒の基礎的な学力を育成するという意識が向上した。また、生徒も、質問をしやすい雰囲気により、積極的に質問したり、理解に努めようとしたりするなど、学習への意欲が向上してきた。

生徒の少人数授業に対する意識調査の結果は次の通りである。

【少人数の授業はわかりやすいですか】　（平成１５年１２月実施）

	よくあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
１年国語	３６％	４２％	１８％	４％
２年英語	２０％	３６％	３０％	１４％
３年数学	３１％	３８％	２７％	４％

（２）対話・承認・交流を大切にする学習集団づくりの研究

日常における生活班や授業における学習班や追究班、各種行事や清掃活動におけ縦割り班などいろいろな形態の集団による活動を経験することにより、お互いをサポートする姿勢やよりよき結果を導き出そうとする姿勢が育ってきた。また、授業の中に「あいあい学習」（能動型の学習）の効果的な場面を考え位置づけることにより、学習意欲も向上してきている。

（３）評価を生かした指導法の研究

各教科の評価規準をもとに各時間の評価基準と評価方法を明確にした授業を実践してきた。実践にあたっては、評価補助簿を作成し活用することにより、一人ひとりの生徒の現状が的確に把握できるとともに、きめ細かな指導を行うことができるようになった。また、個人カードや振り返りカードを作成し生徒が自分自身を振り返る場面を設定することで、学習に対する意欲の変化が見られるようになってきた。

（４）教育環境の整備

本校は、今まで生徒の活動の様子を掲示する場所が少なかったが、パネル等を活用し、掲示場所を拡大し、生徒の活躍の様子を目につく形で校内に残していくことができるようになり、生徒が学校に誇りを持てるようになった。

（５）その他

本校は学力向上フロンティアスクールとして、地域への研究の成果を発信する責任も負っている。そこで、本校の授業研究会を町内の小、中学校へ公開をしている。その結果、他校の先生方から貴重な意見を受けることができ、研究を進めることができた。

また、本校校区の２小学校と合同の研究として、共通重点指導事項を制定し、各家庭への配布と協力の呼びかけを行った。

２．今後の課題

（１）学習内容の定着について
　生徒の学習に対する意欲の向上は見られるものの、教科・学年によっては、意欲に比べ基礎的・基本的内容の定着が十分とは言えない。
（２）朝の選択授業について
　月、水、金の朝の２５分を選択授業として実施してきた。基礎・基本の定着を目指すという点では一定の成果が上がったと思われる。より有効な時間とするために、習熟度別編成やプリント学習から教科担当の授業へと３学期より改善を行い、昼の時間帯に位置づけた。
（３）家庭学習の習慣について
　平時の家庭学習に対する取り組み状況が非常に悪く、自主的な学習に至ってはほとんど取り組んでいない状態が残っている。
（４）学級間、教師間の取り組み状況について
　学校全体として取り組もうとしていることに対する共通認識はできあがっているので、具体的実践の充実を図りたい。
（５）研究の推進について
　学力向上推進部会の各部会での活動が、教科との関係や話し合いの時間の確保がきびしく、より機能させていく必要がある。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

・標準学力テスト　・学期毎の中間・期末テスト　・まいチャレンジテスト
・知能テストの実施　・ＳＥＴ（自己教育力テスト）
・学校評価（保護者、生徒、職員）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・町内小中学校への研究授業の公開（本年度３回））

・研究発表会（平成１６年１１月１８日予定）

・本校ホームページの公開

・郡市及び町学力向上推進協議会での報告

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
☑７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
□その他

【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☑音楽　☑美術　☑技術・家庭
☑保健体育　☑その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無